

ANNUAL



QUARTERLY

REPORT

2023

REPORT

2023

REPORT



2023年度 年次報告書

2023年1月1日～12月31日

一般社団法人

バードライフ・インターナショナル東京

CONTENTS



代表のメッセージ	2
About BirdLife International	3
環境保全活動	
種の保全	5
生態系の保全	6
森林の保全	7
海洋保全	7
地域コミュニティ支援	8
プラスチック資源循環	8
生態系への影響調査	9
生物多様性評価	10
チャリティーイベントの開催	11
BirdLife International Japan Fund for Science 基金	12
広がる支援の輪	13
収支報告	14

代表のメッセージ

バードライフ・インターナショナル東京（以下、バードライフ東京）は、2002年4月に設立され、以後21年間環境保全活動を進めてきました。現在は種や生態系、森林、海洋の保全、地域の人々の暮らしの改善、環境教育など、世界規模で多様な活動を推進しています。2023年はアジアを中心に、アフリカ、南アメリカなど9ヵ国で環境保全活動を実施しました。

バードライフ・インターナショナルの活動は世界122ヵ国/地域、200万人のネットワークに広がりました。

昨年は、TNFDのガイドラインが公表され、生物多様性の保全がますます重要視されるようになりました。バードライフの保全活動や生物多様性評価はより大切になっております。バードライフ東京も、世界中のパートナー団体と力を合わせ、地球温暖化の防止や生物多様性の保全に取り組んでいます。



2024年1月
バードライフ・インターナショナル東京
代表理事

鈴木 恵子

2023年の活動ハイライト

バードライフ東京では、環境保全活動の推進を軸に企業やバードライフ・インターナショナル団体との協働を進めることで、2023年は9ヵ国において環境保全活動を展開することができました。



Our Vision



バードライフ・インターナショナル(以下、バードライフ)は、自然と人が持続可能な共生し得る世界を目指します。

Our Mission



パートナーと共に、自然資源の持続可能な使用に向けて、鳥類とその生息地、および世界の生物多様性の保全に努めます。

Our Approach

1. 鳥類 (Birds):

- 生物多様性の指標としての重視: 鳥類は食物連鎖の上位に位置し、地域の生物多様性や環境の状況を表す重要な指標です。
- 国際的な協力の象徴: 国境を越えて渡りをする特性から、国際協力を進める際のシンボルになります。
- 研究と調査の容易性: 多くの研究者が存在し、また鳥類は日中移動をするため、調査が容易で研究データが豊富に蓄積されています。
- 環境教育の促進: 鳥類は親しみやすい対象であり、環境教育の促進に適しています。

2. 科学 (Science):

- 科学的根拠に基づく保全: 1922年の設立以来、一貫して科学的根拠に基づく鳥類と生態系の保全を推進しています。
- 国際的な評価機関としての役割: 国際的に信頼されるIUCN(国際自然保護連合)のレッドリストの鳥類部門の公式な評価機関として、データを提供しています。
- IBAの選定: 世界中でIBA(重要生息環境)を選定し、そのデータはさまざまな保全活動で活用されています。
- IBATの管理: IUCN、国連環境計画、コンサベーション・インターナショナルとともに、生物多様性評価ツール(IBAT)を開発・管理しています。
- 国際的な認知度と信頼: 生物多様性の保全における権威としての国際的な認知度を有し、高い信頼を得ています。

3. 連携 (Partnership):

- IUCNレッドリストへの貢献: バードライフは、IUCNのレッドリストの鳥類部門の公式な評価機関としての重要な役割を果たしています。
- 理念を共有したパートナーとのネットワーク: バードライフは世界中で理念を共有したパートナーとのネットワークを構築し、国際的な取り組みを推進しています。
- データと経験の共有: 科学データや実績、経験を共有することで、各国・地域が抱える課題を効果的に解決しています。



数字で見るバードライフ

1/8の鳥類が絶滅の危機に瀕しています。



2013年から2022年の主な成果

726種の絶滅の危機に瀕した鳥類が私たちの保護活動の恩恵を受けました。

13,000

以上あるIBAs(重要生息環境)のうち

4,000以上

のIBAsでバードライフのパートナーが保全活動を行っています。

世界的な協定の方針策定やその運用に影響を与えた世界トップクラスの科学的な出版物が

635冊あります。

2022年は**500**種以上の鳥類を再評価しました。

組織概要

名称	一般社団法人バードライフ・インターナショナル東京
代表理事	鈴江恵子
理事	戸田成郎、村井満
設立	2002年4月 バードライフ・インターナショナルのアジア地域事務所を東京に開設 (任意団体として活動開始)



©Birdlife Asia

種の保全

種の絶滅防止に取り組んでいます

ソングバードの保全－インドネシア

近年、インドネシアではソングバードの鳴き声コンテストが急速に普及しており、5億円を超える巨大な産業になっています。ソングバードの需要は高く、多くの野鳥が密猟され、絶滅の危機に瀕しています。バードライフ東京とパートナー団体のブルーン・インドネシアは、2023年から経団連自然保護基金の支援を受け、野生のソングバードの保全に取り組んでいます。本年度は、ジャワ島におけるソングバードの聖地「ソングバード・ヘブン」創出に向けた生物多様性評価の実施やソングバード飼育者、コンテスト主催者の意識・行動変革を進めるための調査や関係者との協議を開始しました。

生態系の保全

野生生物の生態系を守るため、
生息地の保全・整備に取り組んでいます。



©東松島市

震災被災湿地の整備

ー日本

宮城県東松島市野蒜地区に位置する穏やかで素晴らしい洲崎湿地は、2011年の東日本大震災に伴う津波により甚大な浸水被害を受けました。

復興に向けた取り組みにより、再び野鳥が訪れるようになりましたが、生息地としてより安心できる環境づくりを目指し、株式会社アルテ サロン ホールディングス、株式会社ケンジからの支援金を活用し、東松島市とC.W.ニコル・アフアの森財団とともに3年間にわたる「野鳥のサンクチュアリ」の整備に取り組んでいます。

1年目の人工干潟造成工事実施後、カモ類、チドリ類、ハクチョウ類など多くの渡り鳥が観察できるようになりました。本年度は、さらなる人工干潟の造成を進めました。来年度は湿地の拡張を予定しており、干満の潮位差による水循環を促し、湿地の水質保全にも取り組んでいきます。

渡り鳥の移動経路にある生息地の保全

ー日本

渡り鳥は移動ルート上のさまざまな場所で害虫を捕食し、種子の散布や花の受粉に寄与し、生態系を調整する重要な役割を担っています。

バードライフ東京は、パシフィック・センチュリー・プレミアム・ディベロップメントの支援を受け、2020年より北海道内の渡り鳥の生息地の保全活動に取り組んでいます。

2023年は、サロベツ湿原のガンカモ類の中継地の拡張を行うために候補地におけるガンカモ類の利用状況の調査や、中継地としての重要性を訴求するための普及活動を行いました。

Forest Conservation

森林の保全

1990年から2020年の30年間で世界の森林面積は1億7,800万haも減少しています。

ICT技術を用いた森林保全活動の促進 —インドネシア

バードライフが管理する「ハラパンの森」が位置するスマトラ島南部ではアブラヤシのプランテーション開発が盛んに行われており、違法伐採や開墾などの脅威にさらされています。森林を違法活動から守るために2018年より富士通株式会社の支援を受け、同社のICT技術を用いた森林のパトロールやモニタリングを実施しています。本年度は、森林パトロール効率化のためのスキルアップ研修と情報の迅速且つ安定的な共有を実現するためのステーション建設に取り組みました。



©Burung Indonesia

Marine Conservation

海洋保全

海鳥と漁業の共存に向けた
保全活動に取り組んでいます。

遠洋マグロはえ縄漁における海鳥混獲の削減 —日本

漁業による混獲（偶発的に漁具にかかること）は、海鳥が直面する三大脅威の一つです。マグロはえ縄漁では、絶滅危惧種を含む多くのアホウドリ類などが命を落としています。2023年は、デビッド&ルシル・パッカード財団の支援のもと、漁業者、行政、研究者らとの意見交換や、国際的なマグロ漁業管理組織会合への参加、サプライチェーンの国際的イニシアティブに専門的な情報提供などを行いました。SNS「南半球アホウドリ物語」を通して、一般市民向けの普及啓発も引き続き行いました。



©Oli Prince

海鳥と刺し網漁の共存を目指す取り組み —日本

刺し網漁における混獲で、世界中で毎年推定40万羽の海鳥が犠牲になっています。2023年は、東京動物園協会、乾太助記念動物科学研究助成基金、キングフィッシャー財団、デビッド&ルシル・パッカード財団の支援を受け、北海道羽幌町周辺の漁業者や研究者らと協働で、海鳥混獲の現状把握のためのデータ収集を継続しました。また、日本動物園水族館協会の支援のもと、潜水性海鳥を飼育している葛西臨海水族園において、東洋大学などの研究者と共に、混獲回避策の検証実験を行いました。

地域コミュニティ支援

開発途上国の地域社会の抱える課題解決に向けて、
さまざまな取り組みを進めています。

持続可能な森林資源管理と生計向上支援 －インドネシア

インドネシア・ゴロンタロ州では、農地拡大のための森林減少などの課題があります。そこで、持続可能な森林資源管理や生計向上のための知識や技術の普及活動を、JICA（国際協力機構）草の根技術協力事業として実施しています。2023年は、ブルーン・インドネシアや育成した6村の12名の指導員と共に、農家150人へ研修を実施し、有機肥料での作物栽培を開始しました。

詳しくはこちら：

<https://tokyo.birdlife.org/kusanone>

環境配慮型の稲作とオオヅルの保護 －カンボジア

カンボジアでは、農薬や肥料を多用した農業による環境汚染や健康被害などの課題に直面しています。パードライフ東京とカンボジアのパートナー団体であるNatureLife Cambodiaは、2021年から経団連自然保護基金の支援を受け、環境配慮型のブランド米「ツル米」の生産とオオヅルの生息地の保全活動を実施しています。2023年は、ツル米のマーケティングと販売体制の強化、および継続的かつ自律的なツル米生産の体制整備を行いました。

プラスチックの資源循環

プラスチックごみの削減と
循環型社会の実現に取り組んでいます。

地域参加型ペットボトルリサイクルプログラム －日本

ダウ・ケミカル日本株式会社の支援を受けて、廃棄されたプラスチックをリサイクルし、次の清掃活動で活用できるゴミ袋を製作するプラスチック循環型プロジェクトを実施しています。2023年は、鳥をマスコットとするJリーグクラブから構成される「Jリーグ鳥の会」のギラン会鳥（ギラヴァンツ北九州）と福岡県北九州市立曾根東小学校の児童とともに干潟での廃ペットボトル拾い、およびギラヴァンツ北九州のホームゲーム時にスタジアムでのペットボトルの回収を行いました。11月にはギラン会鳥から参加した小学校の児童に完成したごみ袋が手渡されました。来年は、清掃活動の拠点の拡大を目指す予定です。



©GIRAVANTZ

生態系への影響調査

健全な生態系を維持していくために、
科学に基づく調査・研究を実施しています。



©Tohki Inoue

油流出が水鳥に及ぼす影響の モニタリングと評価－モーリシャス

バードライフ東京は、公益信託商船三井モーリシャス自然環境回復保全・国際協力基金による支援のもと、モーリシャスのパートナー団体であるMauritian Wildlife Foundationと協働で、2020年にモーリシャス沖で発生したWAKASHIO座礁事故による油流出が鳥類をはじめとする生態系に及ぼす影響を科学的に評価するための調査を実施しています。本年度は、従来より取り組んでいるシギ・チドリ類や海鳥のモニタリング調査に加え、採餌状況の調査を実施しました。また、継続的な調査体制を構築するための現地関係者向けのワークショップも開催しました。

東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ (EAAFP) は、アジア太平洋地域の渡り性水鳥およびその生息地の保全に係る国際協力をさらに強化することを目的として発足した国際的枠組みです。バードライフ東京では、環境省からの請負業務として国内連絡会や全国大会、パートナー会議の開催などに対応し、アジア太平洋地域における渡り性水鳥およびその生息地の保全を支援しています。また、二国間渡り鳥等保護条約に基づき、渡り鳥などに関する情報の交換、共同研究・調査計画の作成を推進するため、渡り鳥保護の取組に係る調査・検討・取りまとめなどを行いました。

生物多様性評価

生物多様性保全に取り組むための
さまざまな評価ツールを提供しています。

IBAT活用による生物多様性評価

IBAT(生物多様性評価ツール)は、対象地点の周囲にある保護区やKBAなど保全のために指定された地域、絶滅危惧種の分布などを統括して地図上に表示するツールで、バードライフ・インターナショナル、世界自然保全モニタリングセンター(WCMC)、国際自然保護連合(IUCN)、コンサベーション・インターナショナルの4団体によって開発されました。バードライフ東京は、本田技研工業株式会社からの委託により、同社の世界の生産拠点(86拠点)を対象に事業活動によって生物多様性に影響を与える可能性についてIBATを用いて評価を実施しました。

バードライフが提供する生物多様性評価ツール

バードライフは、生物多様性のさまざまなステージの影響を評価するツールを提供しています。



IBAT

Integrated Biodiversity Assessment Tool

生物種や重要生息地のデータを駆使し、生物多様性の初期的な評価を机上で実施するツール。
生物多様性や重要生息地に関する具体的情報を提供。



PRISM

Practical methods for evaluating the outcomes & Impacts of Small-Medium sized conservation projects

中小規模の環境保全プロジェクトのよりよい目標設定、ならびに成果&影響評価を、事前・事後
で実施し、環境活動の好循環をつくるための手引き(キット)。



植林活動の経済価値評価

Economic Valuation of Afforestation Activities

植林によってもたらされる経済価値を1本からでも机上で試算評価できるツール。国内限定。



TESSA

Toolkit for Ecosystem Service Site-based Assessment

特定の場所の生態系サービスの経済価値を、既存のデータや聞き取り調査により評価するツール。

チャリティーイベントの開催

環境への理解を深めながら、
環境保全に貢献する機会を提供しています



©keyshots.com

バードライフ東京は自然保護活動支援のため、毎年2回、東京と大阪でガラ・ディナーを主催しています。全国の企業や個人の方々からご協賛をいただき、チャリティーオークションを通じて活動資金としています。

3月の大阪スプリング・ガラでは1,900万円、今年15回目となった10月の東京ガラ・ディナーでは過去最高となる6,300万円もの収益金を集めることができました。収益金は火災によって大きな被害を受けたオーストラリアのオウムへの支援や、BirdLife International Japan Fund for Science基金、レッドリストへの支援などのバードライフの科学調査に活用しました。



©keyshots.com

名誉総裁 高円宮妃久子殿下によるお言葉



©keyshots.com

資金集めのためのライブオークション

BirdLife International Japan Fund for Science 基金

バードライフの科学に基づいた調査・研究を支援します

高円宮妃久子殿下の名誉総裁ご就任15周年を記念し2019年に設立されたこの基金は本年、当初の目標を達成することができました。

BirdLife International Japan Fund for Science 基金は、バードライフが世界中で行う鳥類の保護や自然環境保護の基礎となる調査研究活動を支援することを目的とした基金です。2023年に5年間で3億円という初期の目標を大幅に上回る金額を達成することができました。2024年からは、本部の研究チームに毎年2,000万円を提供していきます。研究成果は、バードライフだけではなく、さまざまな国際機関や各国政府に基礎データとして提供されるとともに、IUCN(国際自然保護連合)レッドリストとして発表され、自然保護に役立てられています。2023年は、大阪と東京で開催したガラ・ディナーの収益金から一部を充当しました。また、コーポレート・パートナーのショパールジャパン株式会社を始め、個人や団体、企業からも多額のご寄付をいただきました。



世界の絶滅危惧種を解説したRed Data Book



Chopard ショパール

2023年4月にバードライフ創設100周年を記念して、名誉総裁高円宮妃久子殿下御撮影のオオマシコをモデルにデザインされた世界に一つだけの腕時計「L.U.C XP バードライフ」を制作・販売いただきました。この収益金はBirdLife International Japan Fund for Science基金へ充当されました。ショパールジャパン株式会社は2019年の基金発足時より、初のコーポレート・パートナーとしてBirdLife International Japan Fund for Science基金へ継続的なご寄付をいただいています。



©Chopard

広がる支援の輪

バードライフの理念や活動に共感する多くの方々から
ご支援をいただきました

株式会社アルテ サロン ホールディングス 株式会社ケンジ

株式会社アルテ サロン ホールディングスと株式会社ケンジより、店舗のカラー施術の件数に応じたご寄付をいただきました。美容業界は、大量の水を使用し、染料などが水質汚染の原因となり得ることから、バードライフ東京を継続的にご支援いただいています。ご支援は、宮城県東松島市の湿地を復元・整備する活動に活用しています。

ソリマチグループ

創業以来60年以上にわたって日本の会計をあらゆる形で支援してきたソリマチグループより、社内の募金活動によるご寄付をいただきました。今年で4年目となります。同グループがファーストペンギンをイメージキャラクターとしていることから、南アフリカのペンギンの保護活動に活用しています。

株式会社フェリシモ

自社企画商品を中心に、ファッションや生活雑貨など幅広い商品を販売する株式会社フェリシモとのコラボレーション商品を販売しています。本年はバードライフの100周年を記念した新作商品4点が発売されました。1個販売するごとに100円を、野鳥基金としてバードライフにご寄付いただきました。

株式会社伊東屋

株式会社伊東屋の鳥を守り自然を守りたいという想いを込めて作られたボールペンには絶滅が危惧された鳥が描かれ日本伝統の美しく繊細な蒔絵が施されています。そのボールペンの売上の一部をバードライフの環境保全活動にご寄付いただきました。

BLS(バードライフ・サポーターズ・クラブ)

有志の麻酔医の方々によって結成されたバードライフ・サポーターズ・クラブから、今年もご支援をいただきました。会合でのオークションなどを通じ、寄付金を集めていただきました。

LGTウェルスマネジメント信託株式会社

リヒテンシュタイン公爵家が所有する国際的プライベートバンキングおよびアセットマネジメントグループであるLGTの日本法人であるLGTウェルスマネジメント信託株式会社より、ご寄付をいただきました。同社はESGとサステナビリティを重視しており、バードライフの科学的な調査・研究活動を2022年よりご支援いただいています。

公益財団法人全日本弓道連盟

公益財団法人全日本弓道連盟より、ご寄付をいただきました。弓道の矢に鳥の羽根が使われていることから、鳥類の保護に関心を寄せていただき、バードライフの科学的な調査・研究活動を2021年よりご支援いただいています。

Yahoo!ネット基金

Yahoo!ネット基金では、バードライフ東京の運営サポートの他に、ヘラシギ、ケープペンギン、オオヅル、ブラジルの野鳥、インドネシアの森を守る活動と、5つのプロジェクトページを開設し、ご支援をいただいています。

法人賛助会員・個人会員

バードライフ東京には、企業や団体による法人賛助会員制度や、個人で活動を支援していただく制度があります。その他にも、絶滅危惧種の保護活動に里親として関わっていただくレア・バード・クラブ会員制度があります(50音順・敬称略)。

法人賛助会員

2023年の法人賛助会員は、以下の通りです。

- ・IMHホールディングス株式会社
- ・株式会社アルテ サロン ホールディングス
- ・アルファ食品株式会社
- ・株式会社日本触媒
- ・医療法人焔仁会森川内科クリニック
- ・出雲大社
- ・出雲大社文化事業団
- ・高麗若光の会
- ・高麗神社
- ・寒川神社
- ・伏見稲荷大社
- ・北海道神宮
- ・真清田神社

個人会員 (Friends of BirdLife)

個人会員制度では5,000円を1口(1年間)として寄付を募っています。個人会員の方からのご支援はプロジェクト活動費や団体の運営のために活用させていただきます。振込の他、カード決済による会員の自動継続が可能です。

その他のご支援

- ・大本山總持寺
- ・株式会社ワンステップ
- ・富士通株式会社
- ・東友会 関東支部
ボランティア部会

収支報告 (1~12月)

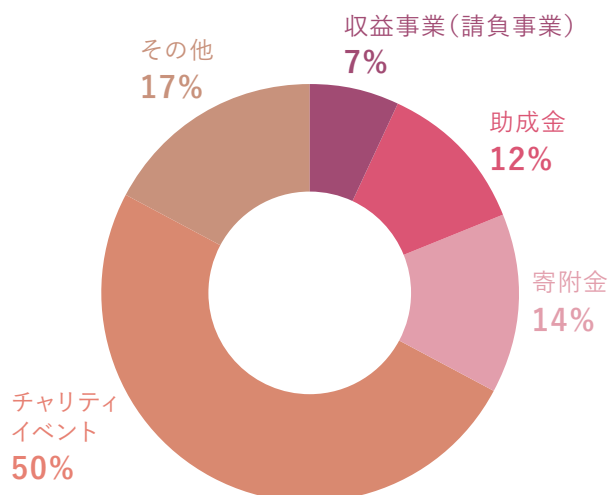
2023年12月末現在の収支報告は以下の通りです。

※2023年12月末日現在の見込(会計監査前)

Income

収入

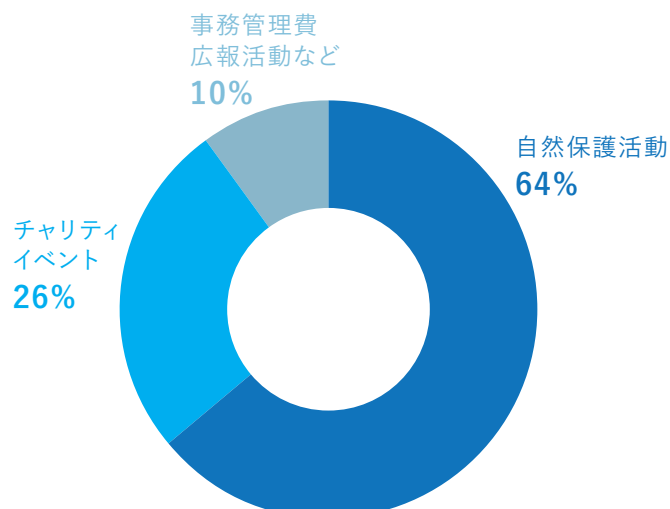
283,229,975円



Expenditure

支出

283,229,975円



Together we are BirdLife International Partnership for nature and people



一般社団法人

バードライフ・インターナショナル東京

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-13-1 ユニゾ蛸殻町北島ビル1階

TEL: 03-6206-2941 FAX: 03-6206-2942

<https://tokyo.birdlife.org>